

ラオスにおける特別支援教育の現状と教員養成校の学生の認識 —ルアンパバーン県の調査から—

鈴木春花（東京学芸大学大学院 教育学研究科 養護教育専攻）

朝倉隆司（東京学芸大学 養護教育講座）

研究背景

途上国において、障害があることは長期的な貧困をもたらす可能性があり、世界の貧困削減のためには障害者へのアプローチが必要であると言われていた。また、障害があることは就学欠損に与える影響が大きいことも指摘されており、途上国における特別支援教育は重要になってきている。

ラオスは、東南アジアに位置する仏教国のひとつで、後発開発途上国とされている（2017年現在）。国は特別支援教育やインクルーシブ教育の重要性を認め、教育政策を打ち出しているが、実際には障害児が教育を受けられていない現状があったり、小・中学校や教員養成の現場では障害児に対して教育を実践していく準備が整っていないなどの課題は多い。



上:ルアンパバーンの街並み
右:教員養成校の生徒たち

ルアンパバーン教員養成校には、初等教育学科、自然科学科、人文科学科、外国語学科があり、幼稚園教諭、小学校教諭、中学校教諭、高校教諭を養成している。特別支援教育や障害児に関する授業は、初等教育学科小学校教諭コース2年次に行われている。それ以外のコースや学年では行われていない。しかし、特別支援学校教諭の養成がないラオスでは、教員養成校卒業後、特別支援学校で働く可能性がある。また公立の特別支援学校が全国に二か所しかないため、通常学級に障害児がいる可能性は高いと考えられる。

ラオスにおける障害児に対する教育の質を向上させるための研究のひとつとして、ルアンパバーン県の特別支援学校の教員や教員養成校の学生に対する調査から明らかになった特別支援教育の現状と、将来教員として障害児と関わる可能性がある学生の認識について報告する。

方法

ラオス北部ルアンパバーン県の特別支援学校(ろう)の教員とルアンパバーン教員養成校の学生3名に対する聞き取り調査と同教員養成校の学生42名を対象とした記述式質問紙調査を実施した。

(1)特別支援学校教員の聞き取り

学校見学をしながら学校概要と〈障害児が教育を受けることの意義〉〈特別支援学校で働くことの難しさ〉について尋ねた。

(2)教員養成校学生の聞き取り

対象者1人あたり30分程度の聞き取りを行い、〈障害児・者に対するイメージ〉〈周囲の障害児・者の様子〉〈特別支援教育に携わることへの不安と課題〉について尋ねた。

(3)教員養成校学生に対する記述式質問紙調査

〈障害児・者に対するイメージ〉〈これまでの障害児・者との関わり体験〉〈障害児が教育を受けることの意義〉〈特別支援教育に関する学習経験〉〈障害児に対して実践したい教育上の関わり〉〈障害児に対して教育を行う時の不安や課題〉について尋ねた。記述内容の分析はテーマ分析の方法*を参考にした。

*Christen Erlingsson, Petra Brysiewicz : A hands-on guide to doing content analysis, African Journal of Emergency Medicine 7, 93-99, 2017

結果

(1)特別支援学校(ろう)の概要(2019年4月現在)

2009年創立。準備教室から中等学校4年生まであり、在籍児童生徒は全部で71名、教員は小学校6名中学校6名。寮生活を送りながら勉強しており、教員は寮生活のサポートもする。政府から学校へ補助金があり、病院受診も無料である。児童生徒は通常学校で教えられている教科を手話で学ぶが、それ以外に手話の授業や職業訓練の時間もあり、自分たちで生活するためのトレーニングをする。

児童生徒の多くが北部の農村地域(ルアンパバーン県・ルアンナムター県・サイニャブリ県等)から来ている。中・南部地域では首都ビエンチャンのろう学校へ通う。かつてはサワンナケート県にもあったが、教員不足のため現在は封鎖されている。



左:学校の建物は新しく綺麗だった



右:クラスの様子、活動のため机は片付けていた

(2)教員の聞き取りから

特別支援学校に通い教育を受けることで、手話という言葉を手に入れ、同じ境遇の仲間に出会えるという意義が語られた。地域社会と関わる学校行事もあるため、障害児たちは自分の世界を広げることができているようだった。

聞き取りを行った教員は、教員養成校卒業である。障害児に対する教育方法や手話については、首都で行われる研修に自主的に参加し知識や技術を補っていた。特別支援学校(ろう)に勤務する教員は、通常業務に加え、手話での授業や寮生活のサポートがあり仕事の負担が大きく、辞める教員も多いようだった。

(3)学生の聞き取りから

学生がイメージする障害とは、視覚障害・聴覚障害・肢体不自由(欠損や麻痺)等の身体障害のことで、知的障害や精神障害については話題に上がらなかった。障害による不自由さに対して気の毒でかわいそうと感じていた。障害児については、障害児のいる家庭は貧困であること、障害児が教育を受けられない現状があることを課題として捉えていた。

将来教員として障害児と関わることについて、「サポートやケアの方法がわからない」「どのような教材を使ったらいいかわからない」「特別支援学校での実習経験がないので不安」という回答が多く、現在教員養成校で受けている授業は現場で働くための知識や技術の提供が不十分な様子が伺えた。

(4)学生に対する記述式質問紙調査から

現時点で4つのテーマが見出された。【障害者に対して正と負の複雑な思いを抱く姿】というテーマでは、3つのカテゴリーに分けられ、教員養成校の学生の障害者に対する認識と態度が明らかになった。

テーマ:障害者に対して正と負の複雑な思いを抱く姿

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
障害による苦労を抱えているという認識	行動の不自由さがあり同情される	行動に時間がかかる
		機能障害がある
	社会に受け入れられていない	障害が無い感覚を知ってほしい
		不自由さに対して同情する
劣等感を抱えている	社会的弱者である	
	社会とのつながりが無い	
周囲の支えが必要である	周囲の人に快く思われていない	
	障害をネガティブに捉えている	
一人の人間として変わりはないという認識	障害を受け入れ前向きに生きている	自信があれば障害をネガティブに捉えなくて済む
		障害が無い生まれた自分は幸せである
	人間としての尊厳がある	障害が無い子供のほうが勉強できる
		不自由さを補うサポートやケアが必要である
障害児・者の力になりたいという肯定的な態度	障害を受け入れ前向きに生きている	身近な人の支えが重要である
		障害と向き合い乗り越える力がある
	人間としての尊厳がある	障害を気にしていない
		障害があっても幸せである
障害児・者の力になりたいという肯定的な態度	障害を受け入れ前向きに生きている	障害があっても感情や能力がある
		障害があっても教育を受ける権利がある
	人間としての尊厳がある	活躍するチャンスを得ている
		脳や心に問題が無ければ勉強できる
障害児・者の力になりたいという肯定的な態度	障害を受け入れ前向きに生きている	障害の有無は選べない
		障害者の力になれることにやりがいを感じる
	人間としての尊厳がある	社会的弱者を助けることは良いことである
		不自由さに対して手を差し伸べたい